

「人類の生みの親星雲」をたずねて

恐龍絶滅の原因について現在は小惑星の衝突説が主流であるが、最近「分子雲遭遇説」が各種の証拠により有力化している。

天文月報4月号に白亜期末期の地層中に宇宙塵が存在する記事が載っていた。これは1990年1月号で藪下氏が指摘された巨大分子雲の太陽系通過説を裏付けるもので大変興味深い。この物質が本当に太陽系を通過した分子雲のものか、それとも火山噴出等に依る地球だけの問題であるのかは将来、月または火星の表面にもし地球と同じような地層があり、その年代の層中に同じ物質が発見されれば、それは太陽系全体の共通現象の証拠だから巨大分子雲が太陽系を通過したという事を決定する事が出来る。

ところで太陽周辺で地球を寒冷にする程の分子雲だったのであれば、それはそんなに稀薄ではなくある程度まとまったものだろう。ことによると当時そろそろ星が誕生する時期にさしかかっていた事も考えられる。それから6500万年——今では新しい星を含んだ新散開星団に進化している可能性もある。もしそれが望遠鏡で眺められたら、そして写真に撮れたら、どんなにすばらしい事であることか。太陽系近傍で誕生後5~6000万年程の散開星団はないだろうか、単純にそれだけの条件で考えてみると、あ、プレアデス星団がそれに相当する！もしあの「すばる」が恐龍を滅ぼし人類を誕生させてくれた星団だとしたらこれは何ともステキな話だ。早速、視線速度の表から6500万年間の飛行距離を計算してみた——が、全く残念な事に「すばる」迄の距離400光年より一桁大きくなってしまった。全く残念だが仕方がない。「すばる」がそういう星団だというのは少し話がウマ過ぎようだった。現実にはキビシイ。

「すばる」以外の散開星団の視線速度は勿論個々で異なっているが、かといってそれ程大きな差でもない。太陽系を通過した星雲も大体同じ位と仮定してみるとそれは「すばる」の約10倍も速くへいってしまっている事になる。しかし数千光年あたりの散開星団ならまだ撮影は可能である。私の手元には星団のくわしい試料がないので現在の所これ以上の事は判らない。もし横方向の固有運動が0で視線速度から計算した6500万年分の飛行距離が実際の距離と一致する星団または暗黒星雲があっ

たら それはわれわれ人類の生みの親である可能性大なのだ。藪下説が正しければ、その天体は必ず存在する筈である。天文版「暎の母」の所在を折りにふれて考えてみたい。天文学は楽しいものである。 杵鞭充千男

【回答】

「理科年表」への要望（86巻8号）、に答えて

8月号の「意見欄」に掲載された佐藤明達氏からの要望にお答えします。

まず「天文学上の主な発明発見と業績」の表についてのご要望です。毎年春に開かれる、理科年表の編集会議でも、この件はたびたび話題にしてきました。昨年「改訂が必要か、必要ならどのような形で行うか」ということを、天文学研究分野の異なる7人の方々にお尋ねし、その、お答えから「改訂は必要、現行の表に若干の加除する程度が適当」という、結論を得ました。最終的には昨年版に対し2件の削除、5件の追加を行いました。これは平成6年版から行われます。

理科年表は実質的には部門ごとに独立して編集を行っています。そこで「発明発見…」の扱いも部門間で相当異なります。天文の欄が他に比べページ数が少ないのも事実です。我々の結論がここに現れています。

2番目はトピックス欄についてのご注文です。トピックス欄には、近年は3—5頁が定期的に割かれています。この欄を我々は機能的に利用しております。天文台に質問の多い項目については解説を載せる場所として利用しました。近未来の春・秋分の日付、日の出・日の入りの時刻計算例などがそれです。新しい項目を採用する時もそうです。近年では赤外線天文学の項はまずトピックス欄に試験的に登場し翌年から本頁に入りました。またハレー彗星の回帰の時にはその予報データを掲載しました。もちろんこの場合は本頁には採用されませんでした。

本文には一般的には（この言葉が適当かどうかわかりませんが）成熟したデータが乗ります。一方トピックス欄では宇宙探査ロケットによる成果のように必ずしも数値化できないような結果（したがって、本文中に採用されることもない）も文章として掲載可能です。

理科年表は毎年、多くの読者から批評をいただき、編集に反映させております。その意味からも佐藤氏の専門的お立場からのご要望はありがたく受けとめさせていただきました。 神田 泰（国立天文台）

編集委員 谷川清隆（編集長）、坂尾太郎、田代 信、中川貴雄、中村 士、濱部 勝、林 左絵子、半田利弘
平成5年11月20日 発行人 〒181 東京都三鷹市大沢2-21-1国立天文台内 社団法人 日本天文学会
印刷発行 印刷所 〒162 東京都新宿区早稲田鶴巻町565-12 啓文堂 松本印刷
定価700円(本体680円) 発行所 〒181 東京都三鷹市大沢2-21-1国立天文台内 社団法人 日本天文学会
電話 (0422)31-1359 (FAX自動切換) 振替口座 東京 6-13595